14成果情報

39－1

〔ガーベラの養液による土耕栽培技術の確立〕

葉掻きが年間生産量に及ぼす影響

南　晴文・沼沢健一・秋山　清*

（大島園芸技術センター・*中央農業改良普及センター大島）

【目的】

ガーベラ栽培は養液による土耕栽培が主流である。効率的な液肥・灌水マニュアルの作成を行い，増収を図ることを目的とする。一方，ガーベラについては基本的な試験が少ない。葉掻きは花芽立ちの促進に効果的であると言われているが，その根拠は明らかでない。養液による土耕実験を行う前段階として葉掻きが生産量に与える影響について調べる。

【試験方法】

供試品種：中輪種サルサを用いた。

試験設計：畦幅 30cm，畦間 60cm，株間 30cm の一条植えの無反復設計とした。

栽培管理：2000 年６月に定植した。元肥（成分量／10ａ）として，N, P_2O, K_2O＝32，31，32Kg を施肥した。2001 年６月以降は，液体肥料（大塚 OKF10）を追肥した。水管理および液肥管理はﾄﾞﾘｯﾌﾟﾁｭｰﾌﾞで行い，pF 値＝1.7～2.0 を維持した。

葉掻き処理：強い葉掻き，弱い葉掻きおよび無処理の３つの区を設けて調べた。月平均１～２回の葉掻きを行い，各処理区の葉数を維持した。葉掻きの程度を表１に示す。

調査：葉掻き開始 30 日後の 10 月の第３週目から開始し，2001 年９月まで調査した。

【成果の概要】

葉掻きによる株あたり葉数と諸形質との関係をみると，年間の総採花本数は，葉掻きの程度を変えることによって大きく変化し，強い葉掻きをすると無処理の 20～30%も減少した（表１）。切り花長は無処理の 80%まで短くなり，花径長は 10%近く短くなった。また，切り花重も 30%近く軽くなった。

次に季節変動をみると，葉掻きは，

①採花本数の多くなる春の時期では，その数を大幅に減少させた（図１）。

②採花本数が少ない秋・冬の時期では，その数には大きな影響をおよぼさなかった。

③他の諸形質に年間通して悪影響をおよぼし，その中で，切り花長への影響が比較的小さいのは５～９月にかけての時期であった（図２）。

以上のように，葉掻きが採花量およびその他の諸形質に効果的な処理であるという結果は得られなかった。しかしながら，株の繁茂は，農薬散布量の削減および防除効果の面においては好ましくないので，葉掻きは随時行わなければならない。そこで，採花量，品質などの条件を総合的に判断して葉掻きを行う場合，夏期および冬期に行うのが薦められる。採花量は，６月下旬～８月の夏期および 11～１月の冬期に減少し，また，この時期の切り花長は長いが，花径長が小さく，切り花重も減少してガーベラの品質は低下する（図３，４，５，６）。また，価格も低迷する時期である。

表1 葉掻きがサルサの諸形質におよぼす影響

処理	形質			
	本数	切り花長(cm)	花径長(cm)	切り花重(g)
強*	904	48.5	6.9	11.5
弱**	1,160	53.1	7.2	13.3
無処理***	1,202	58.6	7.4	15.1

葉掻き処理後の株当たりの葉数

*強 : 15～20 枚前後 **弱 : 40～60 枚前後 ***無処理 : 弱処理の2倍前後の葉数

値:10 株平均値

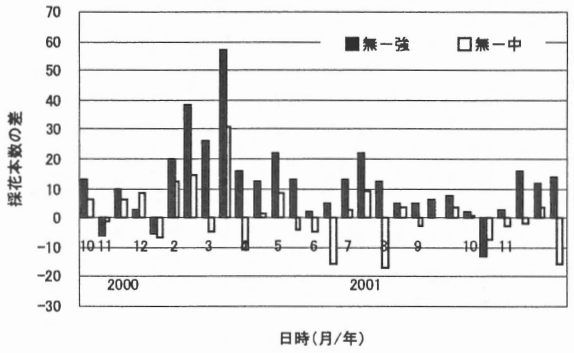

図1. 葉掻き処理が採花本数におよぼす影響(10株平均)

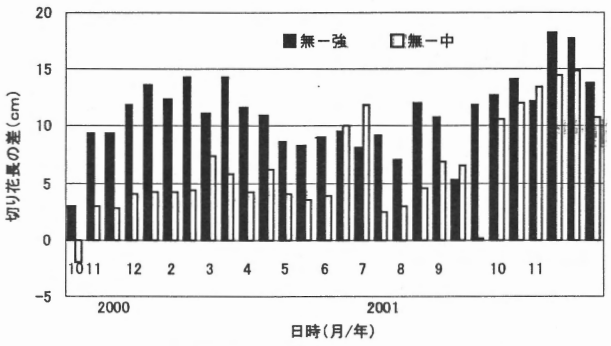

図2. 葉掻き処理が切り花長におよぼす影響(10株平均)

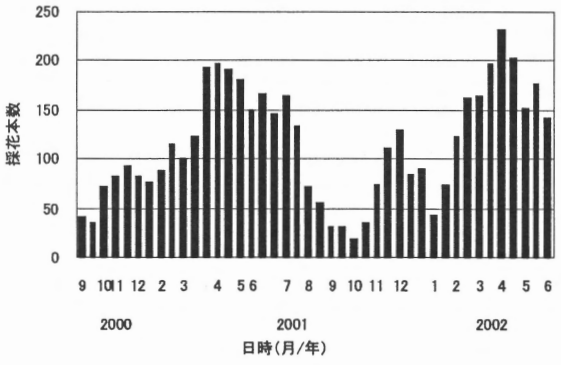

図3. 採花本数の季節変動(23株平均)

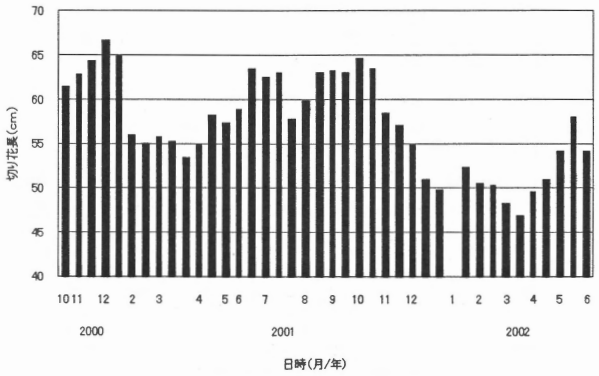

図4. 切り花長の季節変動(23株平均)

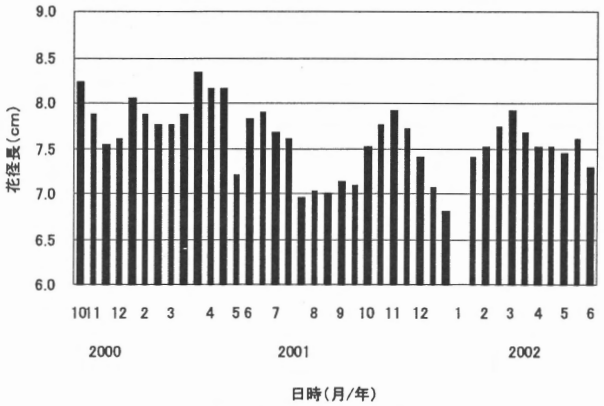

図5. 花径長の季節変動(23株平均)

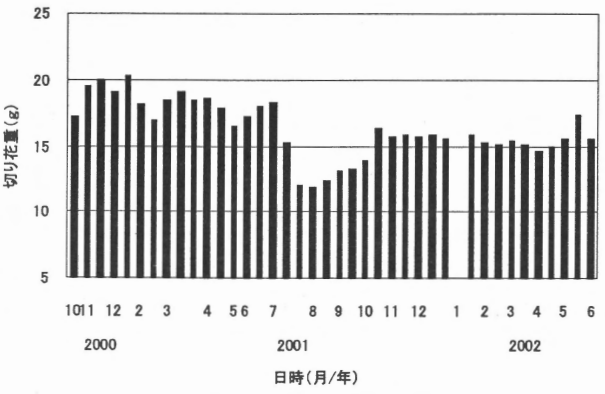

図6. 切り花重の季節変動(23株平均)